

---

# アウト！

おっとり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アウト！

### 【Nコード】

N8611C

### 【作者名】

おっとり

### 【あらすじ】

一話完結型のシリーズものです。そして恋愛小説です。おふざけ無し。しかし、その実態は「カップリングの限界」に挑戦する作者を主人公としたアドベンチャー小説かもしれません。馬鹿な試みですがお付き合い下さい。ただし！注意書きを読んだ上で・・・。

## 注意書き

この小説には、冒瀆的カップリングやグロテスクなカップリングが含まれています。

読む際は、以下の注意点に従って読みましょう。

### 1. ファンフィクション小説

この小説は「名探偵コナン」を下敷きとしたファンフィクション小説です。ファンフィクションというジャンルに嫌悪を感じる方、または「名探偵コナン」自体が嫌いな方には不向きな小説となっております。以上の条件に当てはまる方は読むのを控えましょう。以上の条件に当てはまり、尚且つ、それでも読みたいという方は、医師に相談の上、自己の責任において読みましょう。

### 2. 恋愛小説

この小説は恋愛小説です。基本、二人の男女が愛し合います。そういった話が苦手な方、又は、ボーイズラブ・ガールズラブ等の同性愛小説を好む方には不向きな内容となっております。以上の条件に当てはまる方は読むのを控えましょう。以上の条件に当てはまり、尚且つ、それでも読みたいという方は、医師に相談の上、自己の責任において読みましょう。

### 3. カップリング

この小説で取り扱われるカップリングは、非常に奇抜なものとなっております。原作カップリング重視、又は、他のファンフィクション小説で扱われている様な一般的カップリング（コ哀、新志、平志など）を好まれる方には、過度の不快感を生じさせる危険性があります。事前に医師と相談の上、自己の責任において読みましょう。

#### 4・作者おっとり

この小説は「おっとり」により執筆されたものです。しかし、この小説を「フリーザ様と灰原さん」と似たような内容の小説と思って読むと、一種の「期待外れ感」に襲われ、最悪の場合、死に至る危険性があります。この小説は根本的な部分で間違っています。内容はずただの恋愛小説となっております。「フリーザ様と灰原さん」の読後、30分以内に読むと副作用が出る危険性があります。事前に医師と相談の上、自己の責任において読みましょう。

#### 5・身体への害

もし、この小説を読んだ上で、吐気、目眩、頭痛、じんましん等の異常が生じた場合、すぐに読むのを中止し、医師の適切な診断、治療を受けて下さい。また、以上の注意書きを読まずに誤って本文を読んでしまった場合、すぐに読むのを中止し、清潔な水で目を洗い、すぐに医師の適切な診断、治療を受けて下さい。

#### 6・こんな時は・・・？

(1)「この小説は素適だなあ」と思った場合・・・

あなたの精神はとても危険な状態にあります。すぐに精神科の医師の診察を受けて下さい。

(2)「この小説はまるで犬のフンだ！」と憤りを感じた場合・・・感想・評価を書き込めます。作者に罵声を浴びせましょう。

(3)それでも怒りが収まらない！  
作者にメッセージが送れます。思い切り汚い言葉で罵りましょう。

(4)それでも怒りが収まらない！  
2ちゃんねるに悪口を書き込みましょう。

(5)それでも怒りが収まらない！

医師、薬剤師に相談の上、精神安定剤を処方して貰って下さい。

以上の注意を守って、肩の力を入れず、不真面目な気持ちで読みましょう。

## 1・恋路なれども茨路（前書き）

ここへ来たと言うことは・・・注意書きを読んだんだろうな？

読んでいないなら読んでから来い・・・そして戻って来ない方が良い

注意書きを読んだ？

そうか・・・それでも読むか・・・

本当に読むのか？ 今なら後戻りできるぞ？

そうか・・・そこまで言うなら仕方ない

俺から教えてやれることは二つだ

一つはこの話を書き終えたおつとりの奴の率直な感想・・・

「うわぁ・・・」だそうだ

二つ目は「これを読んだらお前はきっと後悔する」ってこと・・・  
それだけだ

だがお前はその後悔をバネにして生きる・・・

あばよ！

ゲロとじんましんにだけは気を付けな

## 1・恋路なれども茨路

その日、私は本庁でデスクワークをこなしていた。デジタル化の時代。部下達は皆、自分の机に備え付けられたパソコンでせつせと仕事を済ませてしまう。しかし、私はそうはいかない。なにせ、機会音痴なのだ。思うようにならないパソコンと睨めっこをする気力も時間も無いから、ペンを片手に書類を完成させて行くことにした。もう何年もこうして来たのだ。「パソコンなんかには負けはしない」そう思ったのだが……。やはりデジタルはすごい。部下達は次々とデスクワークを終わらせ、帰宅したり、あるいは聞き込みに出かけたりして行く。気が付くと、暇を持て余す部下数名と私だけが残された。

「大変そうですね。手伝いましょうか、目暮警部？」

部下の一人がコピー片手にそう言って来た。「機械音痴」は私の責任。部下の足を引っ張るようなことはごめんだ。私は部下の気遣いをやんわり断ると、再び書類の上でペンを走らせ始めた。そんな時だった……。

「目暮警部、お客さんですよ。」

部屋の入り口で部下が私を呼んだ。お客？ 誰か来る予定だったのだろうか？ 私はペンを止めると扉の方を見た。

「失礼します。」

そう言って入ってきたのは見慣れた少女だった。元部下で、今や全国にその名を轟かす名探偵となった男の一人娘。自分も彼女が小さ

い時から見て来たから良く知っている。

「やあ、蘭くんじゃないか！　どうしたんだね、こんな所にやって来て？」

彼女が警視庁にやって来るのは、そう珍しいことではない。彼女の父親が解決した事件や、その他、彼女自身が巻き込まれた事件の調書を作成する際に話を聞くため呼んだりするからだ。しかし、今日はこれと言って彼女を必要とするような仕事は無い。では、彼女は一体何の用事で来たのだろうか？

「良かった、警部がいて。知らない刑事さんだけだったらどうしよう？　って少し不安だったんですよ。」

彼女はそう言って、私の所まで歩み寄って来ると大きな紙袋を差し出して来た。

「この間、お父さんとコナンと一緒に北海道に行って来たんです。それで、いつもお世話になっている警部や刑事さん達にお土産を。」

「北海道か……。楽しかったかね？」

「ははっ……。殺人事件に巻き込まれました。」

また、不幸を呼び寄せたのか。あの男の死神ぶりは相変わらずのようだ。私は彼女からお土産の袋を受け取りながら苦笑いを浮かべた。

さて、ゆっくり彼女の相手をしてあげたいところだが、そうも言っていられない。なにせ、片付けなくてはならない書類がまだたく



さん残っているからだ。私は彼女に、しばらくすれば佐藤君や高木君が戻ってくるであろう事を伝えたと、再び机に向ってペンを握った。彼女も、私の机の上に積まれた書類を見て状況を察してくれたのか、私に話しかけてくるようなことはせず、大人しく佐藤君と高木君を待っているようだった。そのおかげもあり、私は変に集中力を乱されることもなく、順調に書類を片付けていくことが出来た。そうして、ようやく仕事に終わりが見え始めた頃だった。黙々とペンを走らせる私の横に、突然コーヒークップが置かれた。

「お疲れ様です。」

振り返ると、彼女がそう言って微笑んでいた。どうやら、このコーヒーは彼女が淹れてくれたらしい。そんなことしてくれなくても良いのに。私はお礼を言うのと、彼女の淹れてくれたコーヒーを飲みながら、残りの仕事をささと終わらせた。やっと……。私も少しパソコンを勉強した方が良いのだろうか？ そんなことを考えながら伸びをすると、真っ暗になった窓の外が目についた。時計を見ると、もう七時を回っている。

「わしも帰るか。」

そう呟いて、帰り支度を始めようとした時だった。私は、部屋の隅の椅子に腰掛けてうたた寝をしている彼女を見つけた。まだいたのか……。ということは、佐藤君や高木君はまだ帰って来ていないのだろうか？

「佐藤さんと高木なら、さっき『指名手配中の男に似た不審者を任意同行した』っていう所轄署へ行くと報告を受けましたよ。」

部下に聞くとそう返って来た。しまった……。暗くなる前に帰る

ように言つべきだった。

「蘭くん！ 蘭くん！」

「う．．．ん。あ、すみません！ 寝てました。」

私は彼女を起こすと、高木君や佐藤君はしばらく戻つて来れないことを彼女に伝え、そして、車で家まで送つてやることにした。

帰り道は、帰宅時間ということもあり少し混んでいた。毛利君はきつと心配しているだろう。私は少し責任を感じつつ、米花町の彼女の家を目指して車を走らせた。しかし、他の車が多く、なかなか思うように進めない。普段はこう言うことはあまり気にしないが、今日に限つては「早く進んでくれ」と心の中で念じた。良く知つた仲とはいえ、若い女の子と車中に二人と言うのはどうも気まずい。私はチャリと助手席に座る彼女を見た。彼女は少し寂しげな瞳で、通りを行き交う人の流れを見つめていた。こうして見ると、やはり彼女は母親似だ。ついこの間まで子供だと思つていたが、随分と美しく成長したものだ。おっと、いかんいかん！ 元部下の娘に「そんなこと」を感じるなど、節操が無い。私は再び前を見ると、運転に集中した。

「グス．．．グス．．．。」

それは突然だった。彼女は、突然ボロボロ泣き出してしまった。訳が分からない．．．。私は何か彼女に悪い事でもしてしまったのだろうか？ いや、どう考えても普通に運転してただけだ。ではどうして？ 私は困つた末に、近くにあったファミレスの駐車場に車を止めた。

「どうしたんだね蘭くん？ 何かあったのかな？」

私は彼女に尋ねた。すると、彼女はばつが悪そうに涙を手で払いのけると、私から顔を背けてしまった。

「すみません、何でも無いです。」

「何でもないようには見えなかったが……。何か困っていることがあるのなら相談にのってあげるよ？」

彼女は黙っている。まあ、突然人目もはばからずに泣き出してしまふ位だ。余程のことだろうし、私に相談されても解決できるとも限らない。それに言いたくないこともあるだろう。私は、とりあえずそつとしいてやろうと思い、再び車を発進させようと車のキーに手を伸ばした。

「北海道で殺人事件があったんです。」

彼女は唐突に口を開いた。殺人……。どうやらさつき少し話していた事件のことらしい。

「犯人と被害者の関係なんですけど、元々幼馴染で恋人だったらしいんです。でも、遠距離恋愛になって、心がすれ違うようになって、そして……。殺意に変わってしまった。」

再び彼女の目から涙がこぼれた。街の明かりを反射しながら彼女の頬を流れ落ちて行くそれを、私は黙って見つめていた。

「離れた場所にいるって、大変なことですね。同じ空の下にいるのに、私は学校で勉強したり、友達や家族とおしゃべりしたり。」

でも新一は……。」

犯人と被害者の姿に、自分と、自分が思いを寄せる幼馴染の名探偵の姿を重ね合わせてしまったのだろう。そういえば、彼女は今日、佐藤君と高木君を待っているようだった。ひよつとしたら、仲の良い恋人であるあの二人の姿を見て癒されたかったのかもしれない。

「恐いんです。一緒にいられないことが、この手で触れられないことが、メールや電話じゃなくて、生の声で新一を感じられないことが……。」

そこまで言って、彼女は声を上げて泣き始めてしまった。恋の相談……。私が、一体どんな言葉を彼女に掛け、慰めてやることができるだろう？ 己の限界は弁えている。パソコンのように……。

「……っ！」

彼女は一瞬驚いた表情を見せる。不器用かもしれないが、私にはこれが精一杯だ。私は彼女を包むように抱しめた。彼女は今凍えている。人の心変わりという、辛い現実を目の当たりにしてしまい打ちひしがれている。そんな彼女の心の傷を癒してあげるために、私が出来ることなど……。

彼女は泣いた。私の胸の中で、ただひたすら。私は身じろぎせず、ずっと彼女を抱きしめ続けた。か弱く、傷つきやすい胸の中の少女を、この世のあらゆる残酷さから守りたくて。娘を持つ父親の気分、といったところだろう。そう思った時だった。車窓から人の流れを見つめる、寂しげな表情の彼女が脳裏を過ぎったのは。途端に胸の辺りが苦しくなり、体が熱くなる。娘を思う親？ 少し違う気がする。この感覚には、遠い昔のことだが覚えがある。そう、み

どりと出会った少し後に感じた、あの懐かしい感覚……。ダメだ！ 相手は蘭くんなんだ！ それに私にはもう、みどりと言う立派な妻がいるではないか！ そう思って、自分の中の衝動をもみ消そうとした。しかしその度に、彼女の、あの美しい横顔が浮かんで来てしまふ。こんなに美しい彼女……。欲しい！ 彼女の輝く涙を、全てこの体で受け止め、代わりに溢れんばかりの笑みで、その顔を満たしてやりたい。欲しい！ でも……。ダメだ。しかし……。いや、でも……。そうは言ってもやはり……。

「……。すみません。」

私が心の中で葛藤しているうちに、いつの間にやら泣き声は聞こえなくなっていた。あれだけ泣いたのだ。さすがに気が済んだのだろう。

「ありがとうございます。胸、借りちゃって。フフ、本当に……。目暮警部の恋人になっちゃおうかな。」

冗談を言いながら、彼女は笑顔で私を見つめた。彼女にはやはり笑顔が良く似合う。本当に、良く似合う。似合う、本当に、私の理性を、突き崩してしまうくらい……。

「んッ!？」

彼女の腕にグツと力がこもった。でも、私は離さない。その体も、唇も、もう離さない。私はその想いを全てこの口付けに込めた。彼女は驚いたかもしれない。あるいは嫌だったかもしれない。しかし、そんなことは考えないことにしよう。今ある事実、彼女の腕の力が抜けたこと。そして、その腕が私の背中に回されていることだ。彼女に拒絶の意思が無くなったことを確認し、私は一度、彼女から

唇を離した。

「目暮警部……。」

「蘭くん……。」

互いに二言目が出て来ない。いや、もう何も言う必要は無いのかもしれない。離れたくなかったのだろうし、何より離したくなかった。私達は再び口付けを交わし、互いを求め合うように舌を絡ませた。そして、また見つめ合い、口付けし、見つめ合い……。

そんなことが幾度続いただろうか？ その後のことは、もう何が何だか……。ただ、私が目を覚ますと、そこは家のベッドではなかった。私の見覚えのある寝室ではないし、布団の臭いも私のものとは違う。それに何より、私の腕の中。一糸纏わぬ姿で小さな寝息を立てている……。だんだんと思い出されて来る、彼女との熱い記憶。ああ、とんでもない事になってしまった。きつと私はもう戻れない。全てを失う。きつと毛利君は私を恨むだろう。みどりも……。

でも良いさ。この腕の中にあるのだから。これから先、どんなに茨の道が待っていようと、この腕の中の彼女を、幸せを、笑顔を守ると決めたのだから。

おしまい

## 1・恋路なれども茨路（後書き）

ここまで読んできたあなたへ・・・

つてことで目蘭？ 暮蘭？

我ながら引きました

ここまで来ると・・・原作レ プですネ

クラウドーさんです

G o t o D M C !

G o t o D M C !

ん？

誰だ！ここまで読んできたくせに文句言ってる奴は！

S A T S U G A I すんぞ！

つてことでご愛読ありがとうございました^^；

## 2・そこに在りしは我が喜び（前書き）

おかえりなさいませ！ ご主人様！ お嬢様！  
こちらのお席へどうぞ！

へ？ この先に進む？

それは・・・それだけはお止めください！

うう・・・どうしてもと仰るなら「注意書き」を読んでください・・・

・

読んで来られたんですか・・・？

うう・・・メグメグとしては思い止まって欲しかったです・・・

でもそこまで仰るなら仕方無いですね

それでは「おっとりさん」の書き終えた時の感想だけお教えします

「自分でやって・・・涙が出る・・・」

だそうです

いつてらっしゃいませ！ ご主人様！ お嬢様！

メグメグはここから無事をお祈りしておりますう



## 2．そこに在りしは我が喜び

それは「いつものこと」だった。私は、いつものように探偵団の子供達に誘われてキャンプに出かけ、いつものように事件に巻き込まれた。そしていつものように、彼の陰ながらの活躍で事件は解決・  
・するはずだった。

「逃げたぞ！」

そう、その言葉を聞くまでは全てが「いつものこと」だった。

一体、何がどうしたのか？ 私は、犯人が逃げる瞬間を見ていなかったたので分からない。私が見ていたのは工藤君、今は江戸川君かしら？ 江戸川君が山村刑事を麻酔銃で眠らせ、いつものように推理ショーをして、そして犯人が数名の警察官に連れて行かれるところまで。そこで私は安心し、キャンプ道具をまとめて帰る準備をするため、その場を後にしようとしたのだ。しかし、私が余所見をしていたその数秒の間に「いつも」が「いつも」でなくなる何かがあったらしい。

「こりゃあ山を搜索せにや……。山村！ 一体、何を考えているんだ！」

何が起こったのか？ それを知るために辺りを見回すと、さっきまで賞賛を受けていた「おでこ」が怒られていた。解決したのは江戸川君だが、表面的には山村刑事ということになっている。なのに、何故彼が怒られなければならないのか？ 私は、近くにいた警察官に何があったのかを聞いて見た。

「山村さんが犯人を捕まえ損ねたんだよ。」

それは、今まさに犯人をパトカーに乗せようとした時だった。警官達の一瞬の隙について犯人は逃走を謀ったのだ。捕まえようとする警察官や刑事達の合間をぬって、犯人は力モシカのような脚で山へ向って走った。しかし、その進路上には一人の刑事がいた。そう、山村刑事だ。

「山村！ 捕まえろ！」

一人の刑事が叫んだ。しかし、その叫びも虚しく、犯人は山村刑事の隣をすり抜けることに成功した。犯人自身も驚くほど簡単に……。彼が眠っていたからだ。博士を探偵役にしなかったことが悔やまれる。しかし、それだと起きている山村刑事が鬱陶しいからと、江戸川君は……。

そんなこんなで、犯人は逃げてしまい、彼は「名刑事」から「ダメ刑事」に格下げになってしまったのだ。

「自分の推理に酔って、周りが見えなくなったのか？ 自惚れもいい加減にしろ！」

ああ、あんなに怒鳴られて……。訳も分からずビクついているその背中とはとても小さく見える。ひとしきり怒鳴ると、彼の上司は犯人搜索のため去って行った。彼はと言うと、呆然とした表情で硬直している。寝ていたので状況が飲み込めていないのだろう。しかし、上司に怒られ、自分が「ダメ刑事」のレッテルを貼られてしまったことは理解したらしい。大きな溜息をつく、近くにあった切り株に腰掛けてすっかり落ち込んでしまった。可愛そうに……。私は彼を慰めてあげることにした。

「元気出しなさいよ。別に、逃がしたのはあなただけのせいじゃないわ。」

「君は阿笠さんとこの・・・。」

隣に座った私を、彼は力無い瞳で見つめた。まるで覇気が感じられない。さっきまであんなに元気だったのが、まるで嘘みたいだ。

「僕って本当に、どうしてこんなにダメなんだろう。」

「あなた、別にベテラン刑事って訳でもないんでしょ？　まだ若いんだし失敗だつてするわよ。」

「そうかな？　君らは警視庁の刑事さん達とも知り合いみたいだけど、他の刑事さんと比べて僕ってどうなの？」

「そうね・・・。」

高木刑事や千葉刑事が頭に浮かぶ。みんな失敗して、目暮警部に怒られたりしているのを見かける。しかし、彼と比べるとどうだろう？　みんな確かに失敗するが、彼ほどでは・・・ない。ふと横を見ると、彼は青い顔をしていた。まだ何も言っていないが、私が黙っているから、今の質問の答えが分かってしまったのかもしれない。

「刑事、辞めちゃおうかなあ。」

大きな溜息が漏れた。がつくりとうな垂れたその体は本当に小さく見える。今の私は、薬を飲んで小さくなる前の私より小さいが、彼の隣に座っているとさほどそれを感じない。本当に、小さい。なん

だか彼が可愛く見えてきてしまった。

「そんなこと言わないで。みんなよりスタートラインが後だっただけじゃない。頑張ればきっと追いつけるし、追い越すことも出来るわよ。」

彼の背中に手を当てながら、私は言い聞かせるように言った。ここまで人を慰めたのは初めてかもしれない。ただ、彼の中の幼さが私の母性本能をくすぐるので、どうにも慰めずにはいられないのだ。そして、そんな私の慰めは効果があったのか、彼は次第に瞳の輝きを取り戻して来た。

「そうだね！ 僕だって頑張れば、きっと立派な刑事になれるよね！」

ようやくいつもの元気が戻って来たようだ。逃げた犯人はまだ捕まっていないが、こちらはとりあえず一件落着だろうか。私は「ふう」と、一つ肩で息をした。

「あ、そうだ。」

その時、立ち上がって犯人捜索に向おうとしていた彼が、急に向き直って私の方に戻って来た。

「メールアドレス、交換してよ。」

「へ？」

「いやね。また失敗した時とか慰めて貰いたいなあ、なんてね。」

子供に慰めて貰おうなんて……。彼が立派な刑事になるのはまだまだ先のようにだ。

それからと言うもの、私と彼は時を見てはメールのやり取りを繰り返した。内容は「こんな失敗をした」とか「こんな手柄を立てた」などの彼のメールに、私が励ましのメールを送ったり、お祝いの言葉を送ったりといったものだ。そんなことを何度か経て、次第に私は彼に興味を持つようになった。彼は私には無いものをたくさん持っている。大人になっても変わらない、純粋な心。そして、どんなに失敗しても、何だかんだですぐに立ち直ってしまう強い心。メールの文面から伝わって来る彼の様子を想像するだけで、心が温くなる。そうさせる力が彼にはある。そう、まるでお姉ちゃんみたい……。

そんなことを思い始めた頃、私は自分からもメールをするようになっていった。組織のことを思い出して、辛い時や泣きたくなった時、私は彼にメールをする。取り留めの無いやり取り……。でも、私にとっては掛け替えの無い大切な時間になった。最初は、彼が相談をして来るばかりのメールのやり取りだったのに、今では逆に私が励まされるようになってしまった。

そんなある日、私はまた彼にメールを送った。しかし、その日はいつもと様子が違った。普段なら、どんなに遅くても三時間以内にメールが返って来るのだが、その日は半日待っても返信が来なかった。仕事が忙しいのかもしれない。夜になれば返って来るだろう。そう思い、私はあまり気にせずにはいたが、結局その日、私の携帯が彼からの返信を知らせることは無かった。

どうしたんだろう？ それから三日経っても、彼からの返信は無かった。彼はいい加減な男だが、メールに関してはかなりマメだ。三日も私のメールを放りっぱなしなんてことは考えられない。とすると、彼の身に何かあったのだろうか？

「受信……。」

今日も、朝から何度もメールをチェックするが、彼からのメールは無い。メールボックスを開く回数を重ねる毎に、私の不安はどんどん大きくなっていった。どうして？ 何故メールの返信が無いのか？ いなくなってしまうたのだろうか？ 私の周りから、またいなくなってしまったのだろうか？ 膨らみ続ける不安で、胸が押しつぶされてしまいそうだ。目の前が暗くなって、自分の足元から地面が崩れ落ちていく様な絶望感。暗い暗い闇の底。私の目の前には小さな灯火。私を手を伸ばそうとした時、その輝きはだんだん小さくなっていった。ダメ！ 消えちゃダメ！ お願いだから消えないで！

私は目を覚ました。いつの間に眠ってしまったのだろうか？ 寝ぼけ眼をこする私の目の前では、携帯がメロディーを奏でている。ボーーーーとしながらも、私は携帯を手にとった。「公衆電話」から？

『もしもし。哀ちゃん？ 山村です。』

眠気が一気に吹き飛んだ。携帯から聞こえてくるのは、間違いなく彼の声だ。

『骨折して入院しちゃってさ。ドタバタしてたんだけど、今日になってようやくと落ち着いたんだ。それで一応哀ちゃんにも連絡しておこうかなって。』

いつもと変わらず、軽い調子で聞こえる彼の声。私の体から、スーッと力が抜けていく。

『哀ちゃん？ 聞こえてる？』

「馬鹿……。」

そして、気が付いたら私は涙を流していた。本当に、彼がいなくなってしまうたと思ったから。携帯からは困った様子の彼の声が聞こえてくる。良かった。いなくなっていない。良かった。

それから私は、数分ほど彼と会話をすると電話を切った。次第に落ち着きを取り戻してくる。そうすると、私はあることに気付いた。彼がいなかったことがあんなにも辛いということ。彼がいることがあんなにも嬉しいということ。そして、私は彼が好きだということ。

私は、またキャンプにやって来た。そう、いつものように探偵団の子供達に誘われて。そして案の定、いつものように事件。そして結局、いつものように江戸川君が、今回は博士を探偵役に事件を解決した。そして警察が事後の処理を済ませている時、私は現場の片隅でばつんとたたずんでいる彼を見つけた。

「私達が会ったって、いつもこういう所ね。」

「ははは、そうだね。コナンくんにお被いしてもらったように言っていてよ。」

まったくだ。でも、江戸川君が事件を引き寄せたからこそ、私は彼と会うことが出来た。

「もっと、普段から一緒にいられたら良いのに……。」

「え？ 何？」

あまりに小さな声で言ったから、聞き取れなかったのだろう。彼は

いつものように、のほほんとした表情で私の顔を覗き込んで来た。その大人なのに幼く純粋な笑顔を向けられて、私は遂に抑え切れなくなった。

「私、好きよ。あなたが・・・。」

私の思いの丈。自分でも顔が真っ赤になっているのが分かる。こんな恥ずかしい思いをしても、どうしても言いたかった。彼のそばにいつまでもいられるようになるために。

「わゝ、女の子に告白されたのなんて初めてだよ。嬉しいもんだね。でもさ、君はちょっとばかり小さいからなあ。僕捕まっちゃうよ。」

まあ、分かつてはいた答えだ。私は18歳だけど、今は7才の子供だ。彼が私の愛を受け入れられないのは当然のことだ。でも、それでも私は彼の隣に在りたかった。この体がもどかしい。元に戻れさえすれば、そうすれば・・・。

「まあ、どうしてもって言うなら、君が大きくなってからリトライしてくれちゃってくれたまえ。」

冗談半分の彼の言葉が、私の耳に焼き付いた。

それからしばらくして、私は、宮野志保は群馬県を訪れていた。工藤君やFBIの人達のおかげで、組織は跡形も無く壊滅した。解毒剤も完成させ、工藤君も「工藤新一」を取り戻した。やるべきことは全てやった。だから、私はここにやって来た。暗闇の中で、やっと見つけた希望の光を手に入れるために。

群馬県警本部、その玄関から愛する人が仕事を終えて出て来た。どう？ 私は小さな子供じゃないのよ？ すっかり元に戻ったから、



あなたの言った通り大きくなつて来たから・・・

「あなたの隣に、居させてください。」

## 2・そこに在りしは我が喜び（後書き）

おかえりなさいませ・・・^^；

つてことで今回は山哀です

哀ちゃんのファンの皆様・・・本当にごめんなさい！

ああ・・・切腹コールが聞こえてくる・・・

でもここまで読んできたつてことは

「最初から切らないつて分かつてる」つて感じの内藤選手のような慈悲深い人達ですよね？

そう願います^^；

HARAKIRIは痛いからダメだよな

でも頭を丸めるくらいならします（ただ散髪に行きたいだけ）

つてことで次回をお楽しみに・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8611c/>

---

アウト！

2010年10月10日16時09分発行